

『学園交渉人』

法条真誠の華麗なる逆転劇』

試読版第二弾

著／柚本悠斗

## プロローグ

とある日の放課後——広い校舎を逃げるように走る一人の男子生徒の姿があった。

その後ろには、彼を追いかける複数の女子生徒。一見して羨ましいシチュエーションに見えなくもないが、状況は真逆——彼女たちは鬼の形相で男子生徒を追い詰める。

逃げ疲れ、息を切らした彼は近くの教室に逃げ込み、内側から鍵を閉めた。

一息つくこうとした、その時だった——。

「いやはや、モテる男は違いますね佐野君。羨ましい限りです」

不意に聞こえた声に、佐野は顔を上げる。

西日の差し込む教室に浮かぶシルエット——そこには不敵な笑みを浮かべる黒縁眼鏡を掛けた男子生徒の姿。その隣には、どこか不満そうに顔をしかめる女子生徒が立っていた。

「法条……？　なんでお前がここに……」

法条——そう呼ばれた男子生徒はブレザーの懐から大量の写真を取りだし、投げ捨てるように辺りに散らす。その写真には、佐野と共に複数の女子生徒が写っていた。

それは、佐野が不特定多数の女子生徒と浮気をしている証拠写真に他ならない。

「一年B組、氏家里香さん。一年D組、小山奈津美さん、二年A組の足利雅子さんに三年G組、

黒磯真紀さん。そして——数学の二宮教師。いやはや、生徒だけではなく教師にまで手をだしていたとは、なんたるプレイボーイでしょう。その数、私が把握しているだけでも十人を下回りません。貴方の唯一の失敗をあげるとすれば、浮気がバレたことではなく生まれる国か次元を間違えたことでしょう。我が国で一夫多妻制は認められていない。来世では是非ともハレム物のライトノベル主人公に転生することをお勧めしたい！」

法条は冗長気味に、一息でまくしたてる。

「彼女たちの恨みは相当に深い。一致団結し、貴方の処罰を学園と生徒会執行部へ委ねている最中です。近日中に判決は下されるでしょう。不特定多数との不純異性交遊による退学処分という形でね。仕方のないことです。自業自得、身から出た錆とはこのことでしょう」

「嘘だろ……？」

佐野は愕然とした表情を浮かべる。

「とはいえ、男子生徒なら誰もが一度はハーレムルートを夢見るもの。私とて貴方の気持ちはずなからず理解できます。貴方が望むなら、助けて差し上げないこともありません。訴えを取り下げてくれるよう彼女たちに交渉しましょう。ただし——私は高いですよ？」

「金を取るのか……いくらだ？」

背に腹は代えられないといった様子の佐野に、法条は笑みを浮かべて答える。

「三十万——」

突きつけた三本の指と金額は、異常としか言えない額だった。

「バカげてる……誰がそんな金を——」

「貴方がこれまで彼女たちに貢がせた金額に比べたら少ないものでしょう。よく考えてみてください。このまま放っておいたらご自身の将来がどうなるか？ 学園にばれ、友人にばれ、親にバレ——金で解決できるのです、できないことに比べたら格安だと思いませんか？」

佐野はしばらく悩んだ後、財布から十数枚の札を取り出し法条に渡した。

「残りは明日持つていく……」

法条は金を受け取ると、満足そうな表情を浮かべて教室のカギを開ける。

「壁に耳あり障子に目あり——これに懲りたら、もう二度と浮気などしないことです」

法条がドアを開けると同時、佐野は教室の外で待ち構えていた女子生徒を押しつけて逃げに行った。その背中を見送った後、法条は女子生徒たちに向き直る。

「これでよろしいですか？」

彼女たちは、各々おのおの神妙な表情で頷いた。

「お受けした依頼通り、彼には灸きゅうをすえてやりました。もう二度と浮気などしないで欲しいものです。訴えは取り下げてもらいますが、取り下げたところで学園が彼の処分をどうするかはまた別のお話。退学とまではいかなくとも、それなりの処分が下されるでしょうね」

「……なんか騙だましたみたいで気が引けますね」

「信じてたのに……」

気に病む女子生徒もいれば、中には現実を受けいられず涙を流す女子の姿も。

「法条君、色々ありがとう——」

重苦しい空気の中、それでも依頼者の一人が感謝の言葉を口にしかけた瞬間だった。

「謝辞などいらん。金を払え——」

法条は乱雑に黒縁眼鏡を外し、まるで人が変わったかのように高圧的に言い放つ。

「一人五万で計五十万。依頼は果たしたのだ、耳を揃えて払うがいい」

その変貌ぶりを見て、ずっと隣にいた女子生徒はいつものことかと頭を抱える。

「法条先輩……なにも、このタイミングで言わなくても——」

「黙れこの貧乳が！」

「貧乳じゃありません！ アンダーが細くて着やせするタイプなんです！」

「私を呼ぶ時はご主人様だと言っただろう！ いい加減に学習しろこのボンコツが！」

「自分で佐野先輩の浮気をばらして依頼を受けた上に、佐野先輩からも詐欺みたいな約束してお金をとって、やり口が汚いんですよ！ どんだけお金が好きなんですか！」

「どいつもこいつもバカばかりでぼろ儲け！ 笑いがとまらないわ！ はっはー！」

小バカにするように女子生徒に至近距離で言い放つ。

つまり彼——法条真誠は『こーいう男』なのだった。

## 1 クラス委員長の知られざる秘密

七千人——それが、学園都市の中央に設立された白楊中央学園はくようの生徒総数だった。

五年前——地方再生を目的とした『学園都市計画』に伴い、市町村の合併が行われた。

県内にあった全ての小学校から大学までが六つの地域に集約された結果、一校あたりの生徒数は膨大な数となり、中でも白楊中央学園は圧倒的な敷地面積と生徒総数を誇っていた。

新設された校舎と最新設備の導入、インフラの整備など充実度は他校とは比較にならない。進学率は関東トップを誇り、部活動も輝かしい成績を収め、学内のイベントも充実。

その素晴らしさをあげだしたらさりがなく、当然、在籍する生徒たちの満足度も高い。その結果、設立から数年後——こんな噂うわさが流れ始める。

『白楊中央学園に入学すれば、幸せな学園生活が約束される——』  
瞬く間に噂が広がり、全国から入学希望者が集まり入試倍率は全国トップ。

あらゆる面で規格外すぎる学園だが、それほどまでに高い人気を誇る一番の理由は環境や栄誉ではない。それは、生徒の持つ権限と自主性の高さにあった。

学園都市の運営方針こと『学校教育は民主主義の縮図』という理念の下、白楊中央学園は学

園都市のモデル校として、学園運営のあらゆる権利が生徒に委ねられている。

議会の決定、生徒会予算の管理、校則の設立など、圧倒的支持率を誇る生徒会執行部を筆頭に、まるで学園が一つの国家のような機能を有し、あらゆる決定が生徒によって下される。

そんな学園側が全権を生徒にゆだねる上で決めたルールは一つだけ。

それは——決して校則を破らないこと。

白楊中央学園は膨大な生徒数に対し、生徒に起因する問題や事件は極めて少ない。それは厳しい校則で管理されていることともう一つ、生徒会執行部の努力の結果。

校則を破らないのは至極当然のルールだが、言い換えれば、校則さえ守れば誰もが幸せな学園生活を約束される——生徒会執行部はそう公言し、事実、実現していたのだった。

それが、果たして本当の自由や幸せなのかはともかくとして。

結果、前述の噂は決して誇張された噂ではなく、まぎれもない事実として広まった。

そんな学園であるからこそ、四月ともなれば念願かなって入学を果たした新入生たちが、ここからの高校生活に大きな期待を抱きながら、例外なく青春を謳歌し始める。

はずなのだが——。

「……どうしてわたしはこんなことをしているんだろう?」

春にしては異例の暑さを観測した、四月のある日の放課後。

一年F組の花咲華織はなさきかおりは一人、絶望的な顔で園芸部の菜園の手入れをしていた。

「だあああああ! もう暑い! 汗が気持ち悪い!」

華織はテニスコートほどの広さを誇る菜園の中心で不満を叫ぶ。つけていた作業用エプロンと麦藁帽子むぎわらぼうしを地面に叩たたきつけ、園芸部の部室ことログハウスのドアを蹴けり開ける。

「なんでわたしが法条先輩の菜園の手入れなんてしなくちゃいけないんですか!」

「私を呼ぶ時は法条先輩ではなくご主人様だと何度言えばわかるのだ、この貧乳が!」

ソファアで寝転がりながら華織に罵声を浴びせる彼の名前は法条真誠まこと。

学園の外れにあるログハウスを拠点として活動する園芸部の部長にして、華織の先輩。

「貧乳じゃありません! 日本経済と同じで今が成長期だけです!」

「はっ! 日本経済のどこが成長期だ! 海外市場の暴落につられて無理心中でもするかのように断崖絶壁から飛び降りるようなチャートを示す今の日本経済は、海外投資家から食い物にされる金の墓場そのものだ。冗談はその無駄に明るい性格だけにしろ!」

「無駄とか言わないでください! 明るいのが唯一の取り柄なんですから!」

「自己分析がよくできているではないか。そう、唯一。他にいいところを探す方が難しい。いや、難しくはないか、いいところなどありはしないのだからな。だがそう悲観することもあ



まい。世の中には貴様のような断崖絶壁の胸板に性的興奮を覚える輩もいるらしい」

「だんがっ……」

余りにも意図しない形容詞に、華織は思わず一瞬絶句する。

「断崖絶壁は言い過ぎでしょ！ こう見えてちゃんとBはある——!？」

華織は思わず言いかけて、慌あわてて口を両手で押さえる。

「興奮して自らのバストサイズをカミングアウトする辺り、だから貴様はバカだというのだ」

法条は鼻で笑って一瞥いちべつし、華織は顔を赤くしながら睨にらみ返す。

「余計なお世話です！ それで、どうしてわたしがご主人様の菜園の手入れをしなくちゃいけないんですか！ そもそもわたしは園芸部員じゃありません！」

華織がそう主張した時だった。

「申し訳ありません。園芸部の仕事は本来、わたくしがすべきこと」

紅茶を法条に差し出しながら肩を竦すくめたのは、メイドの格好をした一人の女性。

どう見ても学生ではない大人の女性であり、目を見張るほどに整った美しい顔立ち。長い黒髪と穏やかすぎる口調は、どこかミスステリアスな雰囲気を感じさせる。

「やらせておけばいいのだよ、由香利君。働かざる者食うべからず。生産性のない人間は小間使いくらいが丁度いい。いくら無能だろうと畑仕事くらいはできるだろう」

「ですがご主人様、若い女性にはきついお仕事かと」

「そうですよ！ なにげに砂袋とか二十キロとかあるんですよ！ 持てませんよ！」

「若いだけのポンコツが、そんなに畑仕事が嫌なら依頼の一つも探してこい。貴様への貸しである百万の返済が減らないのは貴様が無能だという証明に他ならない。このごく潰しが！」

「そもそもが、助けてもらったお礼が百万円っていうのがおかしいんです！」

「おかしいだと？」

華織が反論すると、法条は立ち上がり華織に詰め寄る。

「承諾したのは貴様だ。その上、私は親切にも選ばせてやったはずだ。返済のために私の下で働き、貴様が取ってきた仕事の報酬の一割を返済に充てるか、それとも夜の貧乳専門クラブを紹介してやるからさくつと稼ぐかをな。感謝されても文句を言われる覚えなどない」  
迫る法条から逃げるように、華織は数歩後退する。

「しかも支払い能力のない貴様の意向をくみ、分割を承諾し利息も免除してやっているのだ。代わりに菜園の手入れくらい文句を言わずにやるのが人としての礼儀だとは思わないのか？」

「うううっ……」

「わかったのなら仕事をこなせ。それでも文句があるなら聞いてやる。ただし——」

法条は華織のおでこに指を近づけ。

「完済したらだがなああああああ！」

小突きながら口にした。



だが、いじり 高く高額な解決料を要求する法条のやり方——つまり、生徒の悩みを利用して『お金を稼ぐ』ことを生業なりわいとしてしている法条とそりが合わず、いつも口論が絶えなかつた。

「はあ……仕事を探すにしても、どうやって探せばいいんだろう？」

入学後、華織が法条の下にやってきてから二週間、取ってきた依頼はゼロ。

落ち込んでいてもしかたないと思い、華織は気を取り直して顔を上げる。すると目の前には彼氏と幸せそうに腕を組み、ピンク色の空気に包まれている女子生徒の姿が目にとまった。

「うう……こんなはずじゃなかつたのに」

自分にもあんな青春があつたはず——そう思うと、はからずも目じりが僅わずかに滲にじんだ。

「あの……」

華織が自身の学園生活に絶望しかけた時だつた。

「園芸部の人よね？ 中に法条君はいるかしら？」

振り返ると、そこには一人の女子生徒の姿。ナチュラルにかかつた緩いウェーブの黒髪に、幼さの抜けた大人びた顔立ち。並んで立つのを躊躇ちゅうちゅうするほどの高校生らしからぬスタイル。

白楊中央学園は学年によって男子はネクタイ、女子は紐ひもタイの色が違う。一年は赤、二年は黄緑、三年は青。彼女のつけている紐タイは黄緑色——つまり二年生だとわかる。

「いますよ。中でメイドさんとイチヤイチヤしてますけど」

「イチヤイチヤ……？ そ、そう。ありがとう。失礼してもいいかしら？」

「どうぞ」

華織は女子生徒を連れて部室に戻り、ドアを開けた。

「おやおや、仕事を探しに出て行ったわりにやたらと戻りが早いと思えば、これはまた意外な有名人を連れて戻ってきたものだ。てっきり放課後いっぱい走り回った拳句、なに一つ成果を上げられずにブヒブヒと泣いて謝る展開を確信していたのだがな」

「……」

二人は思わず言葉を失う。

法条は由香利に膝枕ひざまくらをしてもらいつつ、ハーゲンダッツを食べさせてもらっていた。

「由香利君、もう結構だ。どうやら来客らしい」

「お粗末様でございます。残りはお仕事の後にでも」

法条は身体からだを起こし、テーブルの上に置いてあったスクエア型の黒縁眼鏡めがねを掛ける。

「どうぞ、お掛けください」

まるでスイッチでも入ったように、法条の表情と声音が変わった。瞳ひとみは鋭く光り、どこか楽しむように口角を上げ——それまで法条を包んでいた冗長気味な冗言が霧散する。

女子生徒が法条の対面のソファーに座り、華織も座ろうとした時だった。

「なぜ貴様が来客用のソファーに座ろうとする！ 貴様は床に正座でもしている。それが嫌なら邪魔にならないよう、部屋の角にでも立っている。トーテムポールのようにな！」

「ううう……」

あまりの扱いの差に、華織はとぼと部屋角に移動する。

「それで？ どうしてここに？ ここは貴女あなたのような生徒には似つかわしくないとこでしよう？ むしろ私のことは毛嫌いしていらつしやると思つておりましたが」

「どうしても……解決して欲しいことがあつて」

「なるほど。貴女ほどの女性がどうしても口にするくらいですから、相当のことなのでしょう。普段から嫌つてゐる私に頼みにくるあたり、切迫した状況だというのも想像たやすに容易い。決して差し上げないこともありません。報・酬・次・第！ ですがねえ！」

法条に全力で煽られ、女子生徒は厳しい視線を法条に向けた。先ほどまでの穏やかな表情は見る影もなく、まるで別人と思えるほどに綺麗きれいな顔が歪ゆがんでゐる。

「あ、あのお……」

華織は恐る恐る手を挙げて二人に尋ねる。

「もしかして二人はお知り合ひですか？」

「知り合ひも知り合ひ。クラスメイトだ」

「クラスメイト!?!」

「彼女の名前は五月女佳奈枝そうとめかなえ。クラス委員長にして、クラス委員長学年代表。容姿端麗、文武両道、才色兼備。定期試験では常にトップ争いに加わる才女にして、由緒正しき地元の地主の

一人娘。いやはや、ハイスベックすぎて笑えるほどの人格者だよ」

「バカにするのはやめてもらえるかしら？」

「バカになどしておりません。むしろ褒め言葉ではないですか」

「あなたが人を褒める行為がすでに、人を馬鹿ばかにしているようなものなのよ」

その指摘に、華織は心の中で激しく同意した。

「いくら払えばいいの？」

「依頼内容も聞かずして金額の提示などできるはずもないでしょう。順番を間違えるとは聡明な貴女らしくもない。まずは依頼内容をお話してください。全てはそれからです」

「それは……」

法条が当然の主張をすると、五月女は口を噤つぶんだ。肩を震わせ、何度も意を決した表情で顔を上げるも言葉が続かない。

そんな様子を見た法条は、不敵な笑みを浮かべて五月女を煽りだした。

「おやおや、どうしました？ 言えないのですか？ 人に言えないから私のところへ来たのでしょうか、であれば時間の無駄です。早々にお帰りください。私も暇ではないのでね」

法条の横柄な態度を見て、華織の中で法条に対するヘイトが貯たまっていく。

「あの……もう少しちゃんと話を聞いてあげませんか？」

「ちゃんともなにも、仕方があるまい。当人が話したがるのだからな」

「それは法条先輩の聞き方に問題があるからです！ 二人の仲が良くないのはなんとなくわかりましたけど、もう少し親身になってあげてもいいじゃないですか！ 女の子には優しくしてあげてください！ あとわたしにも！」

「ご主人様だ」

「ご主人様！」

華織がやけくそ気味に叫ぶと、法条は満足そうに笑みを浮かべて口にする。

「いいか貧乳。相手がなにを悩み、なにに困っているか？ 口にしなければ誰も知ることはできず解決もしないのだ。親身に相談にのって欲しいだけなら人生相談窓口でも行けばいい。なにも解決はしないだろうがな。だが、私は請け負った依頼は必ず解決する！」

法条は力強く言い放つ。華織はその言葉を受け止める他なかった。

なぜなら、華織が園芸部に足を運ぶようになってから今日まで、法条は受けた依頼を全て解決に導いてきた。やり方はともかくとして。

「優しくして欲しいのなら他へ行け。解決して欲しいのなら金を払え」

「……わかったわ」

法条が二択で問うと、五月女はそう呟き、大きく深呼吸をして法条に向き合う。

「話すわ。話すから……お金も払うから、助けてください」

「賢明な判断です。それでは話をお聞きしましょう」



「実は昨日の放課後……」

五月女は言葉を絞り出す。その空気の重さに、誰もが息を呑んだ次の瞬間――。

「――教室でBL漫画をぶちまけてしまったの！」

空気が凍りついた。まさかの返答に、華織は啞然とした顔で五月女を見つめる。

当の五月女は、顔を真っ赤にして今にも泣きだしそうだった。

「……なんだ？ そのBLというのは」

法条は不思議そうに首を傾げ、華織と五月女に交互に視線を送る。

「貧乳、ちよつと説明をしろ」

「せ、説明と……言われましても……」

華織はさすがに動揺の色を浮かべた。BLがいわゆるどんなものかを知ってはいるものの、華織にとっては興味の対象外であり、それを説明するのは戸惑われる。

「えつと……その……ですね」

華織が困り果てながら瞳を泳がしていると。

「……くくつ」

苦笑するような声が聞こえ顔を上げると、法条は必死に笑いを堪えていた。

「わかっていて聞いているでしょ！ 最低！ 女の子になにを言わせようとしているんです！」

「いいやーさっぱりわからん。男同士が卑猥な行為を繰り返り広げる地獄絵図のような光景に、

腐った女どもが息を荒げて興奮するような書物だなんて全くもって知らんなあ。しかし依頼を受けるに当たってBLとやらを理解する必要はあるだろう。さあ、詳しく説明しろ(笑)」

「鼻で笑った!」

華織は怒りともどかしさで肩をプルプルと震わせる。

「ボーイズラブ——通称BLとは、男性同士の恋愛を主題に置いた小説・漫画の呼称です」  
すると突然、黙って三人を見守っていた由香利が語りだす。

「女性向けに作られていることもあり、ビジュアル的な面からムダ毛が生えていることが少なく、また受けの男性においては必要以上に美形に描かれ、一見して女性にしか見えない顔や身体つきだったりすることも多分にあります。最近はバリエーションも増え、人気アニメなどの二次創作から、筋肉質な男性同士のカップリングなど進化を遂げています。BLの最も注目すべき点は細かな心理描写であり、そこが女性向けたる所以ゆえんともいえるでしょう」

あまりの詳しさに華織はちよつと引きかけた。

「あの……由香利さんもBLが好きなんですか?」

「いえ。わたくしは至ってノーマルでございます」

「いやいや! かなりの上級者にしか見えませんか!」

「とんでもないでございます。これしき一般教養の部類です」

凜りんとした物言いに、華織は心の中で突っ込み続ける。

「しかしなるほどな。どうりで今日一日クラスの空気がおかしかったはずだ」

「ご主人様はその場に居合わせなかったんですか？」

「あいにく放課後にクラスメイトと歓談しているほど暇ではないのでな」

法条は改めて五月女に向き直る。

「つまり貴女は、ご自身の特殊な趣味を周りに知られて困っている。そういうことですか？」

「……そうよ」

「できるならなかったことにしたい。今まで通り、クラス委員長としての地位を守りたい！」

「そ、そうよ！」

徐々に劇場的になっていく法条のセリフ回し。

「そのために、私のような男にすらなりふり構わず助けを求めた。まさに私が最初にして最後の砦とりでというわけだ！ 責任重大ではありますが、男なら放っておけるはずありません！」

「引き受けてくれるの!?」

「——断固として断る！」

カウンターパンチのような返答に、五月女は身を乗り出したまま固まっていた。

「そもそもが、どうして隠す必要があるのです？ 貴女はBLが好きなのでしょう。校則違反だとわかっているにも漫画を学校に持ち込んでしまうほどに。それほど愛してやまないのなら隠さずに堂々と胸を張っていればいいのです。無駄にでかいその胸のように。さぞかし注目を集

めるでしょう。真面目まじめだと思っていた委員長は、まさかの腐真面目くまじめだった！」

「そんなの無理よ！ 軽蔑けいべつの視線まで集めたくないわ！」

「でしたらそんな趣味、捨ててしまえばいいのです」

「え……」

「どこかで拾ったなど適当な理由を付けてBL漫画の一冊二冊、クラスメイトの前で破り捨てれば沈静化するでしょう。人の噂も七十五日——しばらく大人しくしていればね」

法条の提示した方法に五月女は言葉無くす。

「なにを迷っているのです？ 簡単なお話だ。クラスでの地位を守りたいのなら選択肢はそれしかありません。体裁を気にするくらいなら、そんな趣味は捨ててしまえばいいのです」

「BL漫画を破ることなんて……できないわ……」

五月女は表情を歪ませる。極めて健全な建前たてまえをかざしている五月女にとって、極めて不健全な本音の暴露。このままでは五月女の地位が崩れ落ちるのは確定的だろう。

そんな五月女の姿を見ていられず、華織は一步踏み出した。

「ご主人様……なんとかしてあげられませんか？」

法条は洪い顔をして呟く。

「いくら払える」

「……五万円くらいなら」

「話にならん！」

法条はテーブルを叩く。大きな音に五月女は小さく悲鳴を上げて身を竦めた。

「いいですか、貴女は勘違いをしている。いや、よくわかっているはずだ。私が人情ではなく金で動く人間であるということは。貴女が勘違いをしているのは私を動かすための金額だ。私に協力を請うのであれば、その十倍の金を用意するべきだった」

「十倍って……五十万？ それはさすがに無茶苦茶でしょう」

「貴女の今の状況に鑑みれば、決して高い金額ではないのでは？」

法条は含みを持たせて問う。

「この学園は生徒の多さに反比例して校則違反が少ない。それは、秩序を守るために厳しい校則が設けられているからです。普通の学校なら漫画の持ち込みなど教師の小言の一つで済みますが、この学園においては一週間の学内ボランティア活動という処分が下される」

五月女の顔に明確な影が落ちる。

「この罰則を重いと感じるか軽いと感じるかは人それぞれでしょう。ですが問題なのは、他の生徒の模範となるべきクラス委員長学年代表たる貴女が校則違反を犯したこと。地位の失墜だけでは収まらず、一定の混乱を招くでしょう。委員長がいいのなら——とね」

「わかっているわよ……だからこうして……」

「更に言えば、地元議会の会長をされている貴女のお父様の耳にも入るでしょうね」

五月女は顔を青くしながら視線を足元に落とした。

「そんなリスクを冒してまでBL漫画を持ち込んだ理由は問いません——ですが、このまま手を打たずに貴女が失うものに比べれば、五十万など安いものだとは思いませんか？」

五月女は頭を抱えて黙り込む。

それはすなわち、交渉の決裂を意味していた。

「残念ではありますが、払っていただけのないのならこの話は終わりです。さっさと家に帰って大好きなBL漫画のイケメンたちに慰めてもらうがいい。ゴーホーム！」

「ちよつと待つて——！」

法条は激しく言い放ち、五月女の背中を押しして強引ごういんに追い出しドアを閉めた。

「ようやく平和な時間が訪れたな」

眼鏡を外して晴れやかな表情を浮かべる法条を見て、華織の感情が逆立った。

「酷ひど過ぎますよ。理解を示すようなことを口にしておいて突き放すなんて」

「充分な金さえ用意すれば、理解を示すどころか救いの道を示してやるさ」

「あなたって人は……」

華織は法条を睨んだ後、背を向けて部室を後にしようとする。

「どこへ行くギリギリBカップ。依頼も取れない貴様は大人しく畑仕事でもしていろ」

「大人しくしていられるわけないでしょう！」

華織は振り返りもせず言い放ち、ドアを叩き閉めて部屋を後にした。

その姿を見送った法条は、ソファーに座り小さく嘆息する。

「花咲様のことを、お話しになられたのですか？」

由香利は先ほどのアイスを手にも、法条の隣に座って膝を差し出す。

「使い物にならんとしたら、私の見込み違いだったというだけのこと」

法条はそう答え、差し出された由香利の太腿かぶももに頭を下ろしたのだった。

部屋を出た華織は、走りながら五月女の姿を探していた。

圧倒的な広さを誇るこの学園では、一度はぐれた相手を探すのは難しい。五月女がまだ近くに  
いるうちに——そう思いながら、学園の中央にある噴水広場に足を運んだ時だった。

「……いた」

噴水の縁に座っている五月女の姿は、西日に照らされて哀愁に包まれていた。

俯うつむき、肩を落とす、視線も定まっていない。その気持を察するのは容易だった。

「五月女先輩」

華織はゆつくりと声を掛けて近づく。

「あなたは……さっきの」

「一年の花咲華織です」

「花咲さんね……どうしたの？」

まるで何事もなかったかのように笑顔を浮かべる姿が痛々しい。それでも、こんな時ですら笑顔を浮かべる五月女は、とても強い女性なのだろうと華織は思った。

「わたしでよければ、お手伝いさせてください」

五月女は無言で華織に座るように促し、華織は小さく頭を下げて腰を下ろす。

「大したことはできないかもしれませんが、でも、わたしにできることがあれば言ってください」

「どうしてあなたが私を助けようとしてくれるの？」

「どうして……」

華織は思わず返答に詰まる。

「今日初めて会った人間よ。縁もなければ義理もないじゃない」

「そんなの関係ありません。強いて言うなら、わたしも法条先輩が嫌いだからです」

「嫌いだから？」

五月女は華織の言葉に首を傾げる。

「なんですかあれ？ 言うだけ言って協力しないなんて酷いです。あの人はいつもそう——  
口が悪くて、やっтерることが無茶苦茶で、お金さえあれば幸せだと思っっているんですよ。自分



の力を過信しすぎなんです。そのうち痛い目にあえばいいんだ。それにあの人——」

喋るにつれて感情的になり、思わず本音が漏れる。

「黙っていれば見た目はいいのに喋るとゲスいんですよ！」

ヒートアップする華織を見て、五月女は小さく笑った。

「そうね。確かに黙っていれば見た目は悪くないわね」

「あ……違うんですよ。変な意味じゃなくて……悪い意味でギャップというか……」

華織は勘違いされまいと必死に言い訳をする。

「でも花咲さん、それだけ彼を嫌っていて、どうしてあなたは彼のところにいるの？」

「それは……まあ一身上の都合といえますか、やむにやまれぬ事情がありました……」

「そう。まあそれは、私も似たようなものね……」

二人はお互いの境遇を察して言葉を濁す。

「……差し出がましいことをしているとは思っています。でも、困っている五月女先輩を見ていたら、もしわたしが同じ立場だったら……そう考えたら、このまま知らないふりはできないって思っただけです。見返りなしに人を助けたいなんて怪しまれますよね。きっと法条先輩に言わせれば、わたしはただの偽善者なんでしょう。でも——」

華織は控えめな胸を精一杯張って答える。

「それを偽善者だっというのなら、わたしは偽善者で構いません」

そう答える華織を、五月女はしばらく黙って見つめ――。

「あなたは法条君に似ているわ」

「はい!? いやいや、やめてください! どこがですか!」

「よく喋るところと、余計なことまで喋るところ」

「あ……す、すみません。つい……」

華織は嫌な汗をかきハンカチで拭く。

「なにかいいアイデアがあるの?」

「そう言われると……今のところはなにも……すみません。考え無しで」

華織は肩を疎める。いつも考え無しに行動してしまう直情的なところを、華織は自分の短所だと思っていた。それでも、考えるよりも先に気持ちが悪く動いてしまうのだ。

「華織さんは、彼なら解決できると思う?」

「そう……ですね。きっと解決できると思います。今までも、どうしようもないような相談や悩みをまさかの一手で解決してきましたからね。ただ、ご存じだとは思いますが、解決の方法は保証しかねます。とにかくやり口は汚いですし、なによりふざけた金額です」

それでも悩む五月女を見て、華織はずっと疑問に思っていたことを尋ねる。

「あの……逆にお聞きしてもいいですか?」

「なにかしら?」

「五月女先輩も法条先輩のやり方は知っていますよね？ これまで依頼に来た人たちもそうでした。それなのに、どうしてみんな法条先輩に頼んだりするんです？」

華織が尋ねると、五月女は少しだけ言葉を選んだ後に答える。

「それはたぶん、彼の人間性はともかくとして、優秀さは誰もが認めているからだと思う」

「優秀さ……？」

「今からちょうど一年前——この学園で大きな事件が起きたのは知ってる？」

「一年前？ いえ……どんな事件だったんです？」

「当時の生徒会長による生徒会費用の横領事件よ」

「え……？」

華織は驚きのあまり言葉を詰まらせた。

「これだけ大きな学園だから当然、生徒会が管理している費用も莫大ばくだい。多少ならバレないと思

ったのでしょね。結果、バレて解任の後に退学処分となったのだけれど、その不正利用

を暴いたのも、生徒会長に対峙たいじして追い込んだのも、事件そのものが明るみになる前にもみ消

したのも、全て法条君一人の暗躍と活躍によるものだったの」

にわかには信じられないことだった。耳にした事実は華織の想像を超える。

「知っているのは一部の生徒と教師だけ。それでも噂は広まるもので、それ以来、法条君は

『生徒会長を退任に追い込んだ男』として密ひそかに注目を浴びたわ。彼ならきつと、どんな問題

や悩みも解決してくれる——でも、そんな彼の評価は一瞬で失墜した」

その理由を、華織はすぐに察した。

「彼は相談にやって来た生徒の悩みを解決する代わりに、異常な解決料を提示したの。彼の評価は一変したけれど、やり方はともかく受けた依頼を全て解決していたのも事実。金額さえまともなら、彼に相談したいと思っっている生徒は多いでしょうね」

「人間性と優秀さって比例しないんですね……」

「そうね……彼が異常な金額をふっかけるのも、彼のところに相談にくるような生徒は、もう背に腹は代えられない状況だってわかっているからでしょうね。私みたいに……」

知られざる法条の一面を聞かされ、華織は複雑な心境だった。

「だから私……お金で解決できるなら、五十万円払おうと思うの」

「本気ですか!? 大金ですよ、払えるんですか!?!」

「アルバイトして、分割なら在学中に返せると思う」

どうしてそこまでして——華織は口にしにかけて言葉を呑む。

その言葉だけで、五月女の覚悟は充分に見て取れた。

「わかりました。わたしが法条先輩に交渉します」

「え——?」

「ひいき目に見ても、法条先輩は五月女先輩に対して好意的とは言えません。だから、わたし

が間に入って分割で受けてもらえるように交渉した方が状況はよくなるかもしれません」

「私としては嬉しいけれど……いいの？」

「もちろんです！ 早速戻って話してきますね！」

華織は駆け足で園芸部の部室ことログハウスへと戻った。

部室に戻った華織は、気分の高揚感に任せてドカンとドアを蹴り開ける。

「依頼を取ってきました！」

ソファアに座っていた法条は目を細めて華織を見据える。

「ほう……まさかこの世の奇跡に直面する日がやってくるとは思ってもみない。この短時間で貴様が依頼を取ってくるとは驚きを超えて驚愕だ。話してみろ」

「その前に、依頼者は分割での支払いを望んでいます。承諾してください」

「承諾するしないは内容で決める。早く話せ」

「先に承諾してください。悪い話じゃありません。ご主人様にとっては容易い案件。労力に見合わない高額依頼ですよ。楽しんで大好きなお金が入るんです。いい話でしょう？ しかも金額は、さつきご主人様が交渉決裂した依頼と同じ五十万円——」

「五十万……だと？」

華織の挑発的な物言いと提示されたその金額に、法条は全てを察した。

「貴様……なにを考えている」

法条は華織に警戒心を向ける。

「なにも考えていません。ただ、ご主人様が嫌いなだけです。それははっきりしました」

「はっ！ 嫌いで結構。主従関係に好意や理解など不要だ！」

華織は法条のペースになる前に、なんとか首を縦に振らせようと思慮を巡らせる。

次の瞬間——華織の頭の中で、電球が光るように名案がひらめいた。

「これはわたしが取ってきた依頼ですから、一割がわたしの取り分。つまり五万円がわたしの借金の返済にあてられる約束ですね。だから——わたしからも依頼します」

「貴様から依頼だと？」

「この依頼を分割で受けてください。達成報酬は五万円です」

法条を真まっ直すぐ見据えて口にした。

「つまり、貴様の取り分を全て放棄するから分割で受けるか？」

「なにか不満でもありますか？ かなりの好条件だと思いますよ」

法条は含みのある表情で僅かに口角を上げ、華織には届かないほどの小さな声で「合格だ……」と小さく呟いた。

「貴様にしては足りない頭を使ったではないか」

「誉め言葉として受け取っておきます」

「その頭には花が咲いているだけでなく、脳みそが詰まっているらしい」

「詰まってるに決まってるでしょ！ てか頭に花が咲くってどういう意味ですか！」

「その当たり前という考え方が視野を狭くするのだ。使いだのない金がただの紙切れと同じであるように、使いだのない脳みそなどカニみそと大差がない。頭を使うとは、いかに多角的に物事を捉えいち早く実行できるかで決まる。なぜなら単一的で遅い決断など誰でもできるからだ。誰もが持っている脳みそを、誰もと違う使い方をする。それを人は天才と呼ぶのだ」

「その口ぶりだと、まるでご自身が天才だと自画自賛しているように聞こえますよ」

「当然だ。その証拠に見せてやろう。この案件の見事な解決を」

「ぜひ見てみたいものですね」

「明日の昼休み、BL漫画を鞆かばんに入れて教室に残るようBL委員長に伝えておけ。それと

——これだけ首を突っ込んだのだ、もちろん貴様も協力してくれるのだろうか？」

「当然です。わたしにできることなら、なんだってやるってんですよ」

この一言が、まさか自分の首を絞めることになるとは、この時の華織は思いもしない。

とはいえ、こうして華織は法条を動かすことに成功したのだった。



そして迎えた翌日のお昼休み——華織は法条と五月女の教室に向かった。

とはいえ、この学園は生徒総数七千人を超える巨大学園——敷地の広さと建物の多さは一般的な高校など比較にならない。新入生が毎年数十人単位で迷子になるレベルの広さ。

各学年に四階建ての教室棟が二つあり、他には特別教室棟が二つ、グラウンドと体育館は三つずつ。中でもひときわ大きいビルのような教職員棟が学園の中央にそびえ建っている。

それだけ広ければ移動時間もかかってしまうのは当然で、併設された一年と二年の教室棟を繋ぐ連絡通路を通って法条の教室に向かうだけで十分が過ぎていた。

「遅いぞ」

「これでも急いできたんです！ てかこの学園広すぎるんですよ！」

華織が到着すると、法条は廊下で華織を待っていた。

「噂の件、もうかなり広まっていますよ。一年の教室棟でも噂話を耳にしました」

「五月女が然るべき役職者というのもあるが、一番の理由はこの学園で校則違反を行う生徒が少ないということだろう。ふざけた内容のくせに軽くスキヤンダル扱いだ」

「ですね……どうするつもりですか？」

「簡単な話だ。要はなかつたことにすればいいだけのこと」

法条は廊下で黒縁眼鏡を掛け、スイッチが入ったように顔つきを変えた。







ばれてしまうリスクを考えたつても、それでも自分と同じBLが好きな人と出会うために持ち込んだのです。一人で楽しむだけでなく、同じ趣味を語れる友達が欲しかった！」

五月女の表情が驚きから一転、せつなそうに歪む。

「志を同じくする友人は、かけがえのないものです。それは趣味に留まらず、学園生活とどに置き換えても同じことがいえるのではないのでしょうか。健全か不健全かは関係ないのです」

「そう……ね」

状況を理解しだしたクラスメイトたちは『あの女の子のやつだったのか』、『てっきり委員長のだと……』、『あの子、よりによって法条に頼むなんてバカな子だな』などと口にする。

華織に向けられる視線は大半が軽蔑を示すもので、華織は泣きたい気持ちになつたのだが——一部軽蔑とは別の意味合いの視線が向けられていることに気付いた。

「どうか聡明なる我がクラス委員長には、慈悲のある決断をお願いしたい」

法条はそこまで言うとう華織を離し、五月女にアイコンタクトを送る。状況を察した五月女は一度大きく深呼吸してから頷き、鞆の中から取り出したBL漫画を華織に差し出した。

「もう学校に持ってきちゃダメよ」

「はい。ありがとうございます」

華織はBL漫画を受け取って頭を下げる。

「友達……見つかるといいわね」

五月女は申し訳なさそうな顔で口にし、華織は首を縦に振る。

「そうですね。きっと見つかると思います」

「これにて一件落着。我が親愛なるクラスメイトの諸君には、場を騒がせたことを心からお詫わび申し上げたい。それでは失礼！」

こうして、華織と法条はざわつく教室を後にしたのだった。

「あなたって人は——！」

「あーもううるさい。一仕事終えた後のマッサージタイムくらい静かにしろ」

その日の放課後、二人は部室で言い争いをしていた。

「静かにできませんか！ おかげでこっちはBLマニアのレッテルを貼られたんです！ しかもあの後教室に戻ったらクラスメイトから『花咲さんてBLが好きなの？』って聞かれてめちゃくちゃ気まずかったんですけど絶対ご主人様が言いふらしましたよね!？」

そんな華織の文句に、法条は由香利から全身マッサージを受けながら答える。

「もちろんだ。貴様がBL趣味だと広く周知することで、BL委員長への矛先を変える必要があった。真実を塗り替えるには後処理と根回しが極めて重要だ。私が抜かるはずもない」

「ドヤ顔で言わないでください！ おかげでわたしの体裁が終了直前、ロスタイムですよ！」

「気にすることなどあるまい。貴様は体裁どころか人生がすでにロスタイム。せいぜい帰宅中はトラックにはねられんように気を付けるんだな。死に際にBL漫画を抱きしめていたなんて家族が不憫で仕方がない。きっと香典代わりにBL漫画が大量に集まるだろう」

「勝手に人の人生を終わらせないでください！」

「そもそもが、貴様が言ったのではないか——『なんだってしてやる』とな」

「そ、それは……確かに言いましたけど……」

「口にした以上、私は貴様の決意を酌み責任を取らせてやったにすぎない。お礼を言われても文句を言われる筋合いなどない。嫌なら今後は言葉の使い方<sup>に</sup>気を付けることだな」

「くろう……」

「なんなら今度は貴様の体裁を救ってやらなくもない。金を払えばだがな！」

「ただでさえ借金生活なのに、そんなお金ないですってば……」

華織が反論を諦め、大きなため息を吐いた時だった。部室のドアがゆっくりと開く。

「失礼するわ」

現れたのは五月女。部室に足を踏み入れると同時に、深々と頭を下げた。

「ありがとうございます」

「謝辞などいらん。金を払え——」

「ご主人様！」

相変わらずな法条を華織が窘める。

「もちろんお金は払うわ。でも、今用意できるのは五万円だけ……これが精一杯なの。バイトでもなんでもして、必ず残りのお金も用意するから分割にしてもらえないかしら？ その代わりに、返済が終わるまでの間、私にできることなら利息代わりになんでもするつもりよ」

「ほう……いい覚悟ではないか。その条件で飲んでやろう」

法条はニヤリと嫌な笑みを浮かべる。

「貴様が借金を返済するまでの間、私が依頼解決において協力を要請した時はすぐに駆けつけろ。貴様のクラス委員長学年代表という役職はなにかと役に立ちそうだ」

「わかったわ」

五月女は迷わず即答した。

「本当にありがとう……」

感謝の言葉を口にして続ける。

「気持ちを感じてもらえて、嬉しかったわ……」

「なんの話かさっぱりわからん。余計な感謝はしなくていい」

そっぽを向く法条を見つめながら、五月女は小さく笑顔を浮かべた。

「じゃあ、私はこれで——あ、そうそう」

部室を後にしようとして、五月女は足を止めて僅かに振り返る。

「その本、華織さんにあげるわ。ぜひ読んでみて」

「えっ!? いや、これは……」

「絶対面白いから。今度、感想を聞かせてちょうだい」

断る間もなく、五月女は満足そうに部室を後にした。

「はっはっは！ よかったではないか、さっそくBL友達ができて」

「わたしはBLなんて好きじゃないです！ 至ってノーマルです！」

華織はからかう法条を睨みながら全力で否定する。

「でもまあ、どうしようもない問題だと思っていましたけど解決できてよかったですね」

「どうしようもない問題だと?」

法条は口にする。

「今回の件など問題と呼ぶほどのものではない。要は起きた事実をなかつたことにすればいいだけのこと。自分自身では致命的と思える失敗であつても、誰かが手を貸せば容易に解決できることなどいくらでもある。今回の件がいい例だ。それよりも——」

それよりも——。

「問題なのは、目の前の事件に気を取られ本当に悩むべきことに悩めないことだ。あの場合、クラスでバレたことのリスクばかりが目立っていたが、メリットだつてあつたはず」

その言葉の意味は、全てが終わつた今なら想像することは容易だつた。

「五月女先輩の本当の悩みは、B L趣味の友達を作ることだった。周りにばれたのは、ある意味チャンスだった——そう考えると、せっかくのチャンスが無駄にしたともいえますね」

「腐った女子の悩みなど知らん。友達探しは頼まれていないからな。だがしかし、B L委員長は頭のキレる女だ。二度も同じ失敗はしないだろう。今度はきつと上手くやるさ」

そんな法条の言葉を聞きながら、華織は思う——。

教室で大見得を切った法条の言葉が、五月女に気付かせる為の言葉だったのではないかと。金だ金だと言いながらも、相手に大切なことを訴えていたように思えてしまう。

もしかしたら、口が悪いだけで意外と優しいのかもしれない。

「ご主人様つてもしかして、ツンデレですか？」

「はあ!? なにを気持ちの悪いことをほざいているのだ貴様は！ 見当外れもいいところだ。

私の座右の銘は『人に厳しく、自分に優しく』他人のことなど知ったこっちゃない。貴様こそツンデレだろう。鼻がツンと上向いて、目尻めじりがだらしなくデレつとしていてるではないか」

「鼻はご主人様が引っ張ったからですよ！ 上向きすぎたらどうしてくれるんですか！」

「どんどん上向いてくれたまえ！ ついでに金運も上げてくれるとありがたい！」

「ぬあああああああああああああああああああああああああああああああ！」

華織は前言を撤回する——この人はやっぱり優しくない！



## 2 セクハラ教師を解雇する唯一の方法

いつもの放課後——華織は園芸部の部室であるログハウスの雑巾がけをしていた。

今日はいにくの雨。日々の日課である菜園の手入れをしなくて済むと喜んでいたのだが、代わりに部室内の清掃を命じられたのだった。

「おい貧乳」

「貧乳じゃありません！ 性格と一緒でちよつと控えめなだけです！」

「性格と一緒だと？ そんなセリフはでかすぎる態度とでかすぎる尻の自己主張を控えてから口にするがいい。胸と違って尻が余剰空間を圧迫しすぎだろう。それよりも——」

法条は窓の縁を指でなぞり、華織に突きつける。

「これで掃除をしたつもりか？ この役立たずが！」

「姑みたいなことするの、やめてもらえませんか!？」

怒り心頭。華織は雑巾を床に叩きつけた。

「だいたいね、菜園の手入れはともかくとして、どうしてわたしがご主人様の身の回りの世話みたいなことやらなくちゃいけないんですか！ なんのためのメイドさんですか！」

「申し訳ございません……」

由香利は紅茶を入れる手をとめ、深々と頭を下げた。

「あ、いや、由香利さんを責めているわけじゃ……すみません」

「由香利君になにをさせようと雇い主である私の自由だ。同じように、貴様の扱いに関しても私の自由。もしも扱いに差を感じるのだとしたら、そこには彼女と貴様に明確な違いがあるからだと言っておこう。埋めようのない致命的な差がな！」

「……なんですか、致命的な差って」

「胸の大きさだ」

「最っ低ええ！」

華織は法条を全力で睨む。

「埋めようのない差ではなく、盛りようのない差といった方がよかつたな。はっはー！」

「バカアホ間拔けるくでなしの人でなし！　なんですか!?　なんなんですか！　Bカップは需要がないとでも!?　これはこれで需要があるんです！　きつと！」

「世間知らずもここまできると清々すがすがしいな。こと女性の胸に対して男が議論を交わす時、確かに巨乳派と貧乳派にわかれる。だがそれは、大きいかツルペタかが論点であり、Bカップなどという中途半端はんぱな胸はそもそも議題に上がらないのだ。その意味では、まさに貴様にふさわしいではないか。つまり貴様は中途半端なのだ。胸も人生も」

華織は折れかけた心を必死に支えて叫ぶ。



部室のドアがゆつくりと開き、一人の女子生徒が入ってきたのだが——その姿に、三人は思わず息を呑む。なぜなら、その女子生徒は全身ずぶ濡れだったのだ。

「由香利さん、タオルをお願いします！」

華織は慌ててタオルを受け取り、すぐに彼女の肩にタオルを掛ける。

「こんなにびしょ濡れで、どうしたんですか？」

「……せて」

「え？」

聞こえなかったわけではなかった。

それほど外の雨音は強くなく、小声でもない——ただ、華織は耳を疑ってしまった。

「先生を一人、辞めさせて——」

濡れた長い髪の奥で激しい怒りに満ちたその瞳に、華織は圧倒される。

「これは面白い依頼がやってきたものだ」

一転した声の調子に華織が気づいて振り返ると、法条はすでに黒縁眼鏡をかけていた。オンモードに切り替わった視線は鋭く、雑巾片手に眼鏡の奥で瞳を光らせる。

「さっそく話をお聞きしたいところですが、そんな格好では風邪をひいてしまいます。由香利君。彼女にジャージを貸して差し上げたまえ」

「承知致しました」

「着替えはいいですけど、どこで着替えてもらうんです?」

「どこもなにも、ここ以外にあるまい」

なにか問題でも? と言わんばかりの法条。

「……男性の前で下着姿になれと?」

「安心したまえ。目を閉じていよう」

その視線は、ブラウスに透けるピンク色の下着に釘付けだった。

「でていけこのむつつりスケベ」

「飼豚に噛みつかれた気分だが仕方あるまい。紳士たる私はお手洗いにでも行ってこよう」

法条は由香利から傘を受け取り、部屋を出ようと華織の横を通り過ぎる。

その時だった——すれ違いざまに、華織の耳元で小さく呟く。

「すぐには戻らない。世間話でもして彼女を落ち着かせておけ」

「落ち着かせておけ?」

どういう意味です——? 華織が口にするより早く法条は答える。

「私は女性をいじめるのは大好きだが、女性に泣かれるのは大嫌いなのでな」

華織はその言葉の意味がわからず、彼女の顔に視線を送り——すぐに気付く。

その頬が濡れているのは、雨のせいだけではなかった。

法条が部室に戻ってきたのは二十分後。

着替えた女子生徒が由香利の入れた紅茶で一息ついて温まるには充分な時間であり、その頃には青白かった顔色にも血色が戻り、僅かに紅潮しているほどだった。

「それではお話を伺いましょう。まずはお名前をどうぞ」

「三年の石橋よ」

「では石橋先輩。貴女の依頼は教師を解雇して欲しいとのことでしたね？ ご存じかもしれませんが私は高いですよ。相手が教師ともなれば尚更だ。いくら払えますか？」

「いくらでもいい……言い値を払うわ」

「素晴らしい！ では七十万円で引き受けましょう！」

「ななじゅ……」

法条の提示した無茶苦茶な金額に、石橋ではなく華織が絶句する。石橋はさして驚いた様子もなく、ポケットから通帳を取り出して法条の前に差し出した。

「失礼——」

法条が確認すると、印字された最後の数字は七桁近い。

「高校生の全財産にしては、ずいぶんとお持ちですね」

「小さい頃からお金なんて使わなかったし、一年の途中からずっとバイトしてたから」

「なるほど。バイトの理由はともかくとして——依頼内容を詳しくお聞かせください」

法条が促すように手を差し伸べると。

「君島先生を辞めさせて欲しいの」

「君島先生? ……わたしは知らないですね」

「残念ながら私も知らんな。そもそも、この学園の教師は三百人以上もいるのだ。知らない教師の方が多いのは当たり前。卒業まで一度も接点のない教師などざらにいる」

二人が石橋に詳しく話を聞こうとした時だった。

「君島宗司そうし教師。担当教科は現文。二十五歳独身、三年目の教師で担当クラスはありません。サッカー部の顧問をしておりますが熱血というよりも穏やかなタイプ。年齢が近いこともあり生徒から慕われています。容姿が整っていることもあって女子生徒からの人気は高く『王子』の愛称で親しまれているそうです。実家は信州で、両親は老舗旅館を経営しているとのこと」

あまりに詳しい由香利に、華織は軽く引きながら尋ねる。

「あの……由香利さんは君島先生とお知り合いなんですか?」

「いいえ。面識はありません。これしき一般教養の部類です」

「……いやいや」

「聞く限り、なるほど優秀な教師のようではありませんか。若くやる気に満ち溢れ、生徒から人望も厚い。そんな教師を辞めさせたいと。これは骨が折れそうだ——理由は?」

「あの人……いいえ、君島先生は私にセクハラをしているの」

「セクハラっ!？」

華織に悪寒が走った。思わず自分の身体からだを抱く。

「それも一度や二度じゃない。ずっと、何度も——」

感情を露あらわにする石橋。その声は震え、異常なほどに熱を帯びる。

「証拠になるようなものはありますか？」

「証拠……?？」

法条は黒縁眼鏡を押し上げ、石橋を見据えながら口にする。

「そうです。なにしろ相手は教師。セクハラが事実だとしても、自らの保身たごの為にもみ消しを図るでしょう。事実、全国の高校では表に出ないだけで、生徒の弱みに付け込んだセクハラや淫行事件が後を絶ちません。近年、教師の資質の見直しや相談窓口の拡充により、ようやく事件が明るみになってきているケースもありますが、あんなものは氷山の一角にすぎない。なぜだかわかりますか？ 理由は簡単——この手のケースは決定的な証拠がないからです」

確かにセクハラは証言があっても証拠が残りにくい。

その上、相手が教師となれば、生徒はことを荒立てることができない。いくらこの学園が生徒の自主性を尊重していたとしても、一生徒が教師を告発することなど不可能に近いのだ。

「特に証拠ついでいえるほどのものは……」



「では、具体的にどういったセクハラをされたかお聞かせください。例えばお尻を触られたとか、胸を触られたとか、スカートの中に頭をつっこまれたとかあるいはパンツの色を聞かれたとかパンツを脱がされたとか、ちなみに今日のパンツは何色ですか——痛い！」

華織は法条の暴走を止めるべく頭を引っ叩いた。

「法条先輩がセクハラをしてどうするんですか！」

「ご主人様だと……それよりも頭を叩くな頭を！ 貴様のようにバカになったらどうする！」  
傍から見たら完全に子供の喧嘩けんかにしか見えない。

「でも、証拠がないとなれば先生を訴えるのは難しいですよね」

「難しくなどない。証拠がなくても教師を解雇する方法などいくらでもある。とはいえ事前の調査や対策は必要だろう。相手は教師、リスクも考慮せねばならん。石橋先輩——三日ほど時間を頂けないでしょうか？ それで解決方法をご提示することを約束します」

「わかったわ……」

「今日のところは以上です。ポンコツ、ドアを開けて差しあげろ。あと傘も差しあげろ」

「傘？ 余ってる傘なんてないですよ」

「貴様の傘があるだろう。無駄にファンシーなピンクで水玉の傘がな」

「このやろう……！」

華織は不満をぶちまけそうになりながらもギリギリ堪こらえる。

「わかりました！ はい、どうぞ！」

「あ、ありがとう……」

石橋は傘を受け取ると、小さく会釈して部室を後にした。

法条はその姿を見送ると、すぐに黒縁眼鏡を外してオフモード。ソファーに身を投げた。

「今回はいつにも増して無茶苦茶な金額を吹っ掛けましたね」

「教師相手だ。むしろ割安だろう」

「そんなにお金を稼いでどうするんです？」

「どうするもなにも、私は一人暮らしだからな。生活費や学費もかかる。それに由香利君というメイドを雇っている以上、給与も払わねばならん。なにかと金があるのだよ」

「なにかとって……」

一人暮らしでメイドを雇っているその素性について、華織は尋ねたくなかったがやめた。一瞬垣間見えた複雑な家庭事情について、安易に踏み込むことは躊躇ためらわれた。

「貧乳、貴様は君島教師の情報を集めてこい。良し悪しあは問わず、些細ささいなことも全てだ」

「わかりました。じゃあさっそく明日から——」

「さっそく今から集めてこい」

「今から!? もう放課後ですし雨も降ってるんですよ！ 傘も石橋先輩に貸しちゃいましたし。てかわたし、帰りはどうしたらいいんです!?」

「放課後だろうと人は残っている。由香利君。農作業用のカッパを貸してやりたまえ」

「承知致しました」

由香利は笑顔でカッパを華織に差し出す。

「……ああもう！ わかりました！ 行けばいいんでしよう！」

華織は半ばやけになりながら部室を飛び出した。



翌日の放課後——昨日から降り続く雨はまだやまない。

「はあ……」

部室の前までやってきた華織は立ち止まり、思わず深い溜息を吐く。

いつまでも立ち尽くしている訳にもいかず、ドアを開けようとした時だった。

「え——？」

ドアが開き、中から一人の女子生徒が姿を現した。

纏う穏やかな空気と、吸い込まれそうになるほどナチュラルに薄い瞳の色。細身のスタイルが凛とした佇まいを引き立たせ、浮かべる笑顔は全てを甘受するような穏やかさ。

身に纏うブレザーの襟元えりについている小さなバッチ。それは、生徒会執行部の役職者だけに

与えられるものであり、校則をモチーフにした辞書の刻印が施されたものだった。

「御法……生徒会長」

部室から出てきたのは他でもない、白楊中央学園の生徒会長こと御法緑。

法条が前生徒会長をリコールした後に生徒会長に着任し、今年で二年目。先日実施した学園内アンケートでは、九十三%という驚異的な支持率を記録した生徒会執行部のトップ。

「こんにちは」

「こ、こんにちは……」

華織が慌てて頭を下げると、御法生徒会長は笑顔でその場を後にする。傘を手に、雨の中ですら優雅に歩く後ろ姿を見つめた後、華織はドアを開けて中に入った。

続きは本編にて！

二〇一七年七月一五日発売！